

【書評】

穴沢眞

『発展途上国の工業化と多国籍企業  
—マレーシアにおけるリンケージの形成—』

横山 久

概評

マレーシアが2020を前にして中進国の罍に捕らわれていると語られて久しい。この罍から脱するには、単なる物的・人的資本の蓄積の量的拡大だけではなく、熟練・技術を習得した地場からの技術革新さらには知識基盤・民間部門重視の高度化した成長軌道に乗せるという課題があることは言うまでもない。この点について早くから警鐘を鳴らし、多国籍企業(MNC)とのリンケージ、MNCからのスピルオーバーこそが鍵であるとして、精力的に実証研究を長年蓄積してきた穴沢眞氏がそれらを集大成してまとめ、刊行されたことは、時宜にかなっており喜ばしく歓迎したい。氏の長期にわたる労作から我々は大いに学ぶべきである。

主な結論

本書は、MNCの理論とMNC受け入れ先の現場をバランスよくまとめると同時に、ダイナミックに変化する東アジア地域の特色さらにはブミプトラ政策にも意を配り、説得的に明快な結論を導いている。確かにMNCを活用した「目覚しい工業化はマレーシア経済の発展に大いに貢献した。」(257頁)しかし、それはMNC「と地場企業との、または大企業と中小企業と

の不均衡成長であった」(258頁)。主にMNCと地場企業の「ギャップがおおきすぎ」(258頁)、「産業集積は多国籍企業主導であり、裾野産業の形成も不十分であった」(259頁)が故である。「工業化の基本は地場企業の発展にあることを今一度認識する必要がある」(259頁)と警告している。

主要二産業の実態

この結論を導くために本書は後半において、電機・電子産業、自動車産業の実態を各進出企業・地場企業へのインタビューを繰り返しながら、実証分析を行っている。その結果、①電機・電子産業においては、「日系…メーカーと地場企業とのリンケージは弱い。…リンケージは日系企業同士で強化されている」(185頁)との特色を指摘し、さらに「地場企業が自らの戦略を持つ」(187頁)ことを求めている。②自動車産業について、部分的には「国策として裾野産業の育成が進められ、プロトン社が強力に地場企業とのリンケージを拡大してい」(218頁)き、「企業間技術移転の有効性を示唆し」(218頁)「技術だけでなく、より広い意味での経営資源の移転がある」(219頁)ものの、今のままでは「輸入代替産業として、また、国民車メーカー

として長年に渡って保護されてきたプロトン社が短期間に国際競争力を持つことは極めて困難である。」(220頁)と断じている。

特に自動車産業について第7章で、主成分分析を行い、プロトン社のベンダー66社が、ブミプトラ系、華人系、外資系の3グループに抽出されることを明瞭に示し、この順で、各グループがプロトン社からの支援を高く評価している(逆に言えば、プロトン社への依存度が高い、プロトン社から独立はしていない、評者)ことを実証的に明らかにしている。特にこの分析は興味深く、高く評価されて良い。

### 構成

以上の実態を踏まえた結論に至るまでの本書の構成を紹介しておこう。全体は3部構成となっており、最初の2章はMNCに関する理論分析で、本書の対象を限定し、工業化とMNCの、とりわけハーシュマンの連関効果、小島のMNCによる生産性改善効果を強調する。工業化にとってMNCは静態的(短期的ではない、評者)な雇用・輸出などの量的増大効果だけではなく、地場産業を通じてリンケージ・スピルオーバーすることにより動態的(長期的ではない、評者)に「累積的循環過程」(45頁)をもたらすことによってこそ工業化は質的に進展するとしている。今ひとつの視点として東アジア「域内の発展段階の異なる国々」に囲まれたマレーシアを強調している。全体として工業化とMNCに関する、とりわけ東アジア工業化の経験の分析に関する、コンパクトで優れた展望となっている。

中間の第3章から第5章では、ゴム・スズ・原油などで代表されていた一次産品輸

出のマレーシア経済が大きく構造変化し、政策的に誘致されたMNCが接ぎ木的に飛び地において操業し、輸出を指向する電機・電子産業を大宗とし、輸入代替する国策自動車産業を含む製造業が主体となったことを示す。従ってこのMNCからのリンケージによる地場企業への産業技術基盤確立こそが問題となった。しかし残念ながらマレーシアにおけるMNCからの現地調達比率は、台湾・韓国のそれが年々上昇した先達の経験とは異なり、極めて限られたものでしかなかったとしている(144頁、確かに重要な指摘である。が、MNCからの技術移転効果はこうした量の問題だけではなく質的に、地場産業による、R&D等への製品高度化、全般的な技術変化もまた問題ではないか。この質的变化を示そうとした第4章は両者の違いは示すものの、地場産業のMNCによる技術変化を必ずしも示すものとはいえないであろう。この点は今後の課題である。評者)。以上を受けて最後の3章では具体的に、電機・電子産業、自動車産業について分析し、その地場産業へのリンケージを上記のようにまとめる。

### 残された課題

付加的に、本書が依拠するような伝統的な工業化論では捉えていないマレーシアにとっての課題を、オランダ病(資源輸出による非工業化)に興味ある評者として示しておきたい。①工業化を経験した多くの先進工業国(日本、NIESを含み)は一般的に繊維・衣服・身の回り品産業を始発産業としていた歴史的事実から省みると、これら産業の隆盛が必ずしも顕著ではないマレーシアの経験はどう捉えるか、②さら

にこれに関連して ITC の技術革新 (衛星からの情報伝達など) がもたらした特異な経済発展パターン、インドやフィリピンの ITC サービス産業の経験、③イスラム国家マレーシアの今一つの大きな特色 (ハラール製品、イスラム金融など) をどう取り込むか、④近年顕著となってきた MNC の送り出し国としてのマレーシア、などが今後取り組むべき新しい課題ではないであろうか。

(文真堂、2010年3月、293ページ)

(よこやま・ひさし 津田塾大学)